

天皇・皇后両陛下のパラオご訪問に思うこと

宮原 豊(9組)

少し思うところがあって、天皇・皇后両陛下が4月9日に慰霊のために訪問されたパラオのことについて紹介します。

ミクロネシアのパラオ諸島南端のペリリュー島は長さ10キロ、幅3キロの小さな島で、そこで日本軍1万人強、対する米軍は4倍の4万人兵力が激突したところです。米軍は3日で島を制圧するつもりだったのが、実に70数日も日本軍に抵抗され、死闘の末に日本軍はほぼ全滅、生き残った日本兵はわずか200数十名という壮絶な「玉砕」でした。

当時の日米両軍にとってこの小さな島の戦略的重要性の評価は未だ定まらず、引き続き歴史家の研究材料であるようです。重要拠点のフィリピンに近く、航続距離の長い飛行機の発着可能な飛行場の建設が可能で、日本までの飛行距離から考えるとお互いに絶対に譲れない重要ポイントであったかもしれません。生存者のうち34人は昭和20年8月の終戦も知らずに昭和22年に投降勧告を受けて出てくるまで戦い続けていたのだそうです。更に後になってジャングルから帰還したグアムの横井さんやフィリピン・ルバング島の小野田さんのことは有名ですが、その前にも丁度我々が生まれる直前にこういうことがあったのです。

そもそも「玉砕」とは何か？ペリリュー島の前に、アッツ島の時に「玉砕」という言葉が初めて使われたそうですが、これは大本営作戦の大失敗(なすすべもない大惨敗)を隠蔽し美化する言葉として時の軍指導部ばかりかマスコミにとっても実に都合のよい言葉であったと思われる。このパラオの激戦でも美化された言葉の陰で、多くの犠牲者を出したことは残念でなりません。美しい玉となって砕け散るという言葉は、硫黄島でも沖縄でも、そしてフィリピンでの泥沼のような消耗戦でも、さらには神風特攻隊の出現に至るまで軍指導部の失敗を隠蔽し、潔く死ぬことを美化する呪縛的な言葉になったのではないかと思われて仕方ありません。

この34人のことは、後に平塚征緒氏が一人ひとりにインタビューし、詳しく記録しています。彼らは帰国後三十四会(みとしかい)を結成したのですが、敵と戦っていた時と違い、洞窟での隠遁生活は一枚岩の一致団結とはいかず、勝ち組・負け組の醜い争いもあったそうです。

さて、パラオのことですが、日本軍の前に、第一次大戦後に日本が国際連盟からの委託統治をしていたパラオには多くの民間日本人が移住して現地の人々とともに生活していました。日本政府内に南洋庁が設けられ、植民地経営をしたのですが、その中で日本語教育も重要な施策でした。はじめは国際連盟の規約により植民地にも軍の駐留はなく、日本軍がパラオに進駐するのは国際連盟を脱退した太平洋戦争も目前になってからだそうです。

話が跳びますが、宮城県蔵王町には「北原尾」という集落があります。戦後パラオから引き揚げた日本人が入植し開拓した地域です。蔵王町町史にもその経緯が記録されています。私は2000年ごろに仙台に住んでいましたが、(戦後55年が過ぎ)彼らは高齢化する中で望郷の念が強くなり、生きているうちにもう1回パラオを見たいと熱望していました。何人かは団体旅行で訪ねたようです。仙台でのことですが、当時のパラオ駐日大使のマサオ大使(日本名だが、日系ではない)が仙台訪問された時には秋保温泉で初めて温泉入浴を経験してもらいました。

さて、話は更に変わりますが、2001年秋、フィジーでの日・太平洋諸島国開発会議の後で、パラオを代表して出席していたナカムラ・クニオ前大統領(パラオの初代大統領で引退直後)と会議終了後に成田空港まで一緒だったことがあります。仙台にいた時に知った蔵王の北原尾の人々のことを彼に話した時の表情が忘れられません。一瞬驚いたようで(そういう集団入植のことをご存じないと感じました)、話の続きを紹介すると怒ったように無口になりました。ナカムラ大統領は日系人ですが、彼は会議の時から日本語は一切使っていません。(後で知ったのですが)父親は三重県の生まれで、彼は戦後もパラオ人として生きてきたので、パラオから帰国した人々の日本での生活の一端を聞いて複雑な思いを抱いたのだらうと思います(これは私の後付けの想像であり、全く違うのかもしれませんが)。

パラオの国旗は青地に黄丸ですが、青は大洋、黄丸は陽を受けて輝く月をイメージしているそうです。「日の丸」に対して「月の丸」と言うべきものです。国旗に象徴されるように日本とは非常に深い関係にあります。今でも日本語と文化の名残が色濃く残されています。パラオの人にも少なからず戦禍は及んだものの、戦後の日本に対する国民感情としては、中国やフィリピンと違ふとすればパラオでは住民を巻き込んでの戦闘にならなかったことは幸いでした。これは米軍が押し寄せてきた時の日本軍現地司令官がパラオ人を戦闘に巻き込まないようにと立派な判断をしたからだと思います。

この度の天皇・皇后両陛下の長年の祈願であったペリリュー島での慰霊は、今後ともこの地域の人々にも全ての戦争犠牲者とその家族の胸にも深く刻み込まれるものと思いますが、たまたまパラオについて多少とも知った戦後生まれの日本人の一人である私にとっても感慨深く思いを新たにするものでした。

以下、パラオ関係の資料(書籍とURL)を参考まで紹介します。

「生還」玉砕の島ペリリュー戦記(平塚征緒著、学研、2010年8月刊)について
1944年9月15日、ペリリュー島へ米第1海兵師団を中心とする延べ四万に及ぶ米軍が襲いかかった。当時東洋一といわれた飛行場奪取を目的とするこの作戦について、第1海兵師団長のルパートス少将は3,4日で終わると公言していた。だが、迎え撃つ一万名弱の日本軍守備隊は、

珊瑚礁の洞窟に潜み米軍を待ち構えていた。未曾有の激戦によりおびただしい犠牲を出した海兵隊は、継戦能力をなくしこの戦場から撤退して行った。さらに驚くべきことに、玉砕の島で終戦後の昭和 22 年 4 月まで、洞窟やジャングルに潜み 34 人の日本軍兵士が生き残っていた。本書は、この 34 人の証言記録をもとにペリリューの激戦の様相と救出までの苦闘のドラマを描いたものである。

著者:平塚 紘(ひらつか まさお):1937年、茨城県生まれ。出版社勤務を経て編集プロダクション(株)文殊社を主宰。主な著書に『生きている陸軍刑法・敵前逃亡』、『グアムの戦いなど多数。

証言記録・生還・玉砕の島 ペリリュー戦記:

<http://plaza.rakuten.co.jp/ryu32/diary/201301060000/>

パラオの戦争遺跡は凄すぎる！ 34 人の日本軍将兵:

<http://s.ameblo.jp/shiragamajin/entry-11825729274.html>

パラオの日本軍の美しい話:

<http://blog.livedoor.jp/remmikki/archives/4395547.html>

(2015 年 4 月 11 日記)